

(3) 萩原のまちと祭礼にみる歴史的風致

1) はじめに

大分市萩原地区は、江戸時代の岡藩主中川久盛なかがわひさもりによって今津留村より船着き場が移された際、参勤交代の出入港地(イビの口)として町が整備され、現在でも当時の町割りが現存している。その後、徳川家康の孫にあたる、越前藩67万石の藩主、松平忠直まつひらただなおの配流地はいりうちとして府内目付の厳しい監視のもと、4年間にわたって居館きょくあんが置かれた。元禄14年(1701)に府内藩の所領となって以降は府内に次ぐ人口を有し、商業、物流の町として発展した。そんな萩原を支えていたのが中世の頃より史料に散見できる「製塩業」であった。岡藩、府内藩においても重要な産物として、別府湾沿岸の萩原塩浜はぎはらしおはまで生産され、行商人や農民によって各地へ運ばれた。萩原の町には塩問屋しおどんやや商家しょうかが多数存在し、今もなお土蔵造りの家屋が残されている。また、明治から昭和初期にかけては稲作が盛んであり、明治32年(1899)には、灌漑用水路かんがいとして明治大分水路が完成し萩原地区の東側を南から北へ流れていた。



当時の面影を偲ばせる家屋と明治末期の萩原の町並み

2) 建造物

萩原天神社

文亀3年(1503)に創建されたと伝えられており、慶長元年(1596)の慶長豊後地震と津波による被災の後、現在地に遷したと考えられ、祭司さいしは萩原天神社かんじょうを勧請した堤刑部左衛門つつみぎょうぶ ざえもんが行っていた。祭神は菅原道真公すがわらのみちざねで8月の第4土曜日に祭礼が執り行われている。神殿は一間社流造いっけんしやながれづくり、拝殿は入母屋造妻入で唐破風が設けられている。屋根は銅板葺である。棟札によると明治32年(1899)の建築である。昭和57年(1982)に区画整理に伴い修理している。



萩原天神社拝殿

長久寺

堤刑部左衛門の弟にあたる堤数馬丞久つつみかずまじょうひさあきら願によって天文2年(1533)に創建されている。府内藩記録の各所にもその名を散見できることから、その歴史は古い。『大分市萩原 歴史・文化の検証』(平成9年(1997))によれば、現在の本堂は、近世末期に建築を開始し、明治元年(1687年)に完成している。木造入母屋造、本瓦葺である。当時境内には常行寺たっちゅうと呼ばれる塔頭も存在していた。



長久寺本堂

3) 活動

3) - 1 萩原天神社の御祭礼

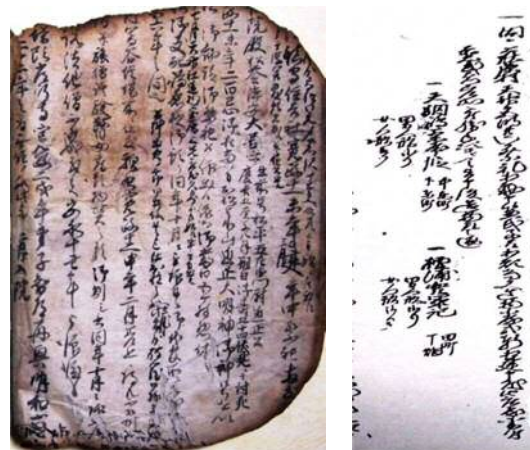
現在、萩原天神社の御祭礼は8月25日に近い第4土曜日に執り行われている。

御祭礼の歴史については、萩原村庄屋『岡家文書』によると「宝暦3年(1753)に府内藩に造物を用いた御祭礼の開始を届け出た」と記されている。御祭礼の様子は、『府内藩記録』(享和2年(1802))や『社寺録』(明治6年(1872))等にも散見する事ができ、明治初期までは各町内が趣向を凝らした造物を製作し、町の各所や神社境内に展示していたことが見てとれる。また、地域行事の際には、渡り拍子(祭囃子)が演奏されていたことも記されている。現在、御祭礼の形式は御神体を乗せた御神輿が氏子町内を回り御旅所へ渡御を行ったあと、長久寺周辺を通り、萩原天神社へ還御する神幸祭及び曳山の巡行へと移行しているが、曳山の舞台、神社の人形家では人形の展示が行われており、当時の形式が受け継がれている。

近代になると造物は神社の境内に常設された展示場所に展示されている。近世においては、「造物小屋」の呼称で統一されていたが、『神社編纂』(明治20年(1887))によると、近代では「人形小屋」となっている。現在の人形小屋は昭和62年(1987)8月20日に完成したものである。明治から昭和の地図には萩原内に数軒の人形屋が確認される。

人形には町内会が祭礼時に祈念する内容と関連性のある題材が選ばれる。平成30年(2018)新町西町内会では「平成30年7月豪雨」からの復興を祈念し、被災地一帯に所縁のある毛利元就が選ばれた。配布された手ぬぐいも広島を意識した「鯉」の意匠であった。

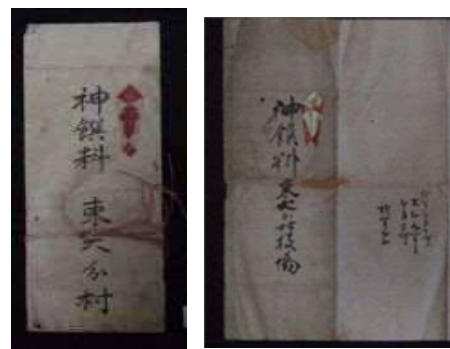
御祭礼当日、萩原の全町内の中から当番町が「座前」として、神社や神主、宮総代の世話役をする習慣が残っており、かつては東大分村より神饌料が渡されていた。当番町は年番制である。近世の御祭礼では見ることが出来ない習慣であり、全町内で山車の巡行を行うようになったのは、近代以降の習慣ではないかと考えられる。



『岡家文書』(左)『府内藩記録』(右)



境内の人形家と山車に飾られた人形



東大分村より座前に渡された神饌料

【祭礼行事の運営組織】

萩原には当時の町割りがそのまま残されている。祭礼行事においても、この町割りを基に運営が行われている。

『府内藩記録』(享和2年(1802))によると、近世の造物行事においては2町合同で1つの出し物を出していた事が読み取れるが曳山行事への移行とともに1町ごとの運営となっている。

各運営町名

浦町	堺町	上西町	下西町	上本町
中本町	下本町	上東町	中東町	下東町
新町西	新町東	田町	丁畠	住吉町

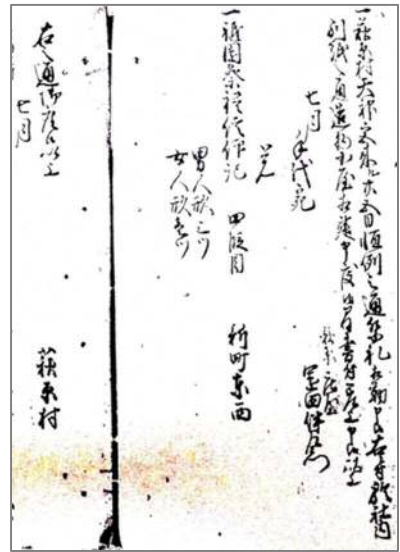
住吉町、堺町は通称町名、その他町名は小字名

【曳山行事の移行】

『神社慣例』(明治30年(1897))によると、天明年間、「萩原はしばしばの大火に見舞われ多くの被害を受けた。復興を祈念する気持ちから藩侯の許しを得、村内十三ヶ所に見立て細工を飾り、人形山車四台を参拝する」と記されており、近世における曳山行事の存在をうかがうことができるが、他の近世～近代初期の史料には人形山車の存在は一切記されておらず、造物の記



拝殿横の人形家での展示



『府内藩記録』2町名



新町西町内会所有の人形山車

述しかない。天明2年(1782)から20年後、享和2年(1802)の御祭礼の記録にも造物としか記されていない。おそらく、この史料が記された明治30年頃、萩原においてはこのような伝承が伝わっており、通説となっていたのではないかと考えられるため、近代以降の形式であるといえる。



曳山行事の様子



新町東 (人形山車)



新町西 (人形山車)



下本町 (人形山車)



中東町 (人形山車)



上本町 (人形山車)



堺町 (太鼓山車)



下西町 (太鼓山車)



田町 (太鼓山車)



住吉町 (太鼓山車)



上西町 (太鼓山車)



丁島 (太鼓山車)



中本町 (太鼓山車)

【曳山の装飾】

明治初期から昭和初期にかけては県下最大数の合計22台程(1町2台の町があった)の山車を所有していた。時代は変わり、台数こそ減ったものの、製塩業で栄えた町の繁栄の面影をうかがうことができる。現在、獅子組の浦町以外の12町から12台の山車が巡行に参加(1台は神社展示)しており、市内でも最多数を有している。萩原地区の山車の特徴として挙げられるのが豪華絢爛な装飾の数々である。欄間らんまや隅棟すみむね、前溝まえがまに取り付けられた繊細かつ迫力のある彫刻と施された鮮やかな極彩色は近隣の地区にも類を見ない。



新町東町内会所有の前溝彫刻



各町内会所有の欄間彫刻・隅棟彫刻の一部

(動植物、霊獣、神話の一場面等から題材を選び製作されている)

【お囃子】

『府内藩記録』(天保12年(1841))によると萩原地区では近世の頃より地域行事の際には渡り拍子(祭囃子)が演奏されていたことが見て取れる。現在、山車を所有する萩原近隣の地区全てに同一の「渡り拍子」(節回しや叩き方などは地域性がある)が存在している。

使用される楽器は大締太鼓、附締太鼓、篠笛である。曲目は巡行中に演奏する「渡り拍子」と御神輿かんぎよが還御したあとにしか演奏されない「ハネ」の2曲が存在する。



左から大締太鼓(3尺~3.5尺)・附締太鼓・篠笛(七穴六本調子)

チキリンに使用されていた楽器類 鉦・太鼓(下東町所有の明治期製作の太鼓)

【渡り拍子】

巡行中、道中で演奏されるのが「渡り拍子」である。力強くリズムミカルな曲調で巡行に華を添えている。大締太鼓の奏者が単独で「打ち込み」を行い、お囃子演奏の開始を皆に知らせる。その合図を受け篠笛の奏者が単独で吹き出しを行う。吹き出しが終わると周囲の者の「ソーレ」の掛け声とともに全員が一斉に演奏を開始する。その後、1小節ごとに歯切れの良い掛け声が入る。曲が1周するとまた初めからの繰り返しとなる。



巡行中の渡り拍子演奏の様子

【ハネ】

神輿が御着きになったら「渡り拍子」は打ち止めとなる。萩原天神社から山車を格納庫へ仕舞うまで演奏されるのが「ハネ」である。演奏の手順は渡り拍子と同じである。

【浦町獅子組】

15町の内1町である浦町(獅子組)からは御獅子おししが繰り出され鈴を鳴らしながら勇壮で華麗な舞を披露し、神輿の先導及び守護の役割を果たす。

一時期は萩原村沖から1組が参加していたが区画整理事業によって集落が開発された事に伴い、獅子頭を浦町が譲り受け保管している。



神輿を守護する獅子組

【宮入】

祭礼当日、各町より山車が神社前に集合する。神事のあと、振鈴を振り大きな音を鳴らす氏子の方々を先頭に神輿が出立する。それにつづいて山車が萩原の古いまちなみを巡行する。

御神体を乗せた御神輿は、氏子町内を回り御旅所へ渡御を行った後、萩原天神社へ還御する。御神幸を終えた神輿が宮入りをする際には、全町内の若者（山車組）が鳥居の前に立ちふさがり、御神輿の宮入を全力で阻止する。御神輿が宮入り、御神体が還御した時点で御祭礼は終了となるため、少しでも長く押合いを繰り広げ御神輿の宮入を遅らせる。



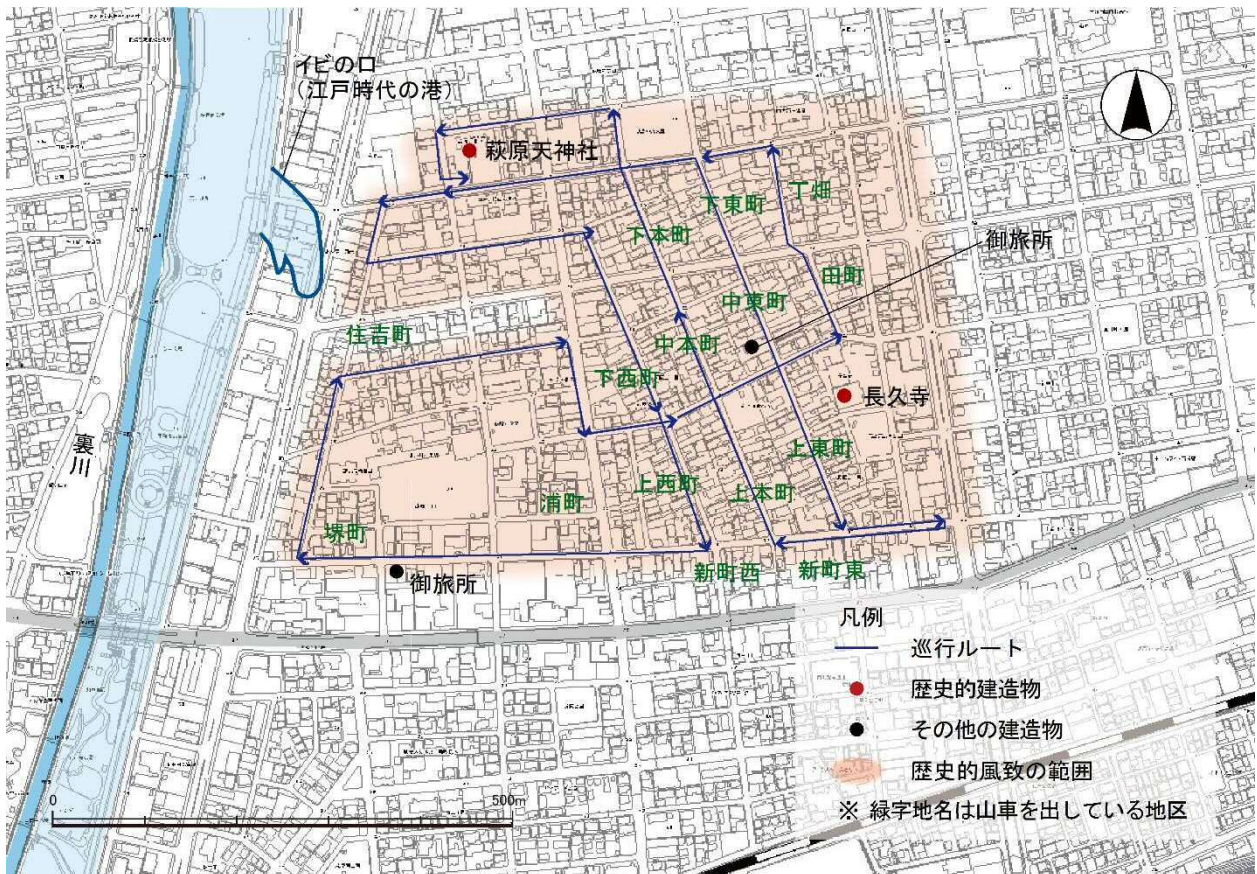
昭和期の宮入りの様子（拝殿前）

4) まとめ

萩原地区は戦後に区画整理が進んだが、江戸時代からの町場には古い町割りが残され、古い土蔵造りの家数件がいまも現存している。

こうした景観の残るまちなみを神輿とともに、萩原の伝統である豪華な人形山車が巡行する祭りの形が、現在も子供から高齢者まで幅広い世代が参加しながら維持されており、まちなみと祭礼行事が密接に結びついた歴史的風致となっている。

写真：使用した古写真は当時、津田稔氏撮影によるもの。山車写真等は高山晴彦氏提供によるもの。史料：『府内藩記録』『岡良一氏所蔵文書』『神社慣例明治三十年調』『神社編纂明治二十年』『社寺録明治六年』引用：堤 亮介（2016）『大分市萩原、歴史・文化の検証-近世～近代を中心に』地域史料叢14 花書院



萩原天神社夏季祭礼範囲図